

平成29年12月30日(土)

老球の細道382号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

毎週のようにクリニックがあり、その準備に毎日が充実。色々なレベルのゲームを観戦する機会も加わり、まさにバスケットボール月間だった。折しも12月21日は「バスケットボール生誕126年」記念日。体調も順調でインフルエンザにも失恋。世界情勢も戦争の危機が口喧嘩だけで終わりひとまず安心。2017年終わりよければすべてよし。

1・読書から

◆「習練とは死に立ち向かう訓練をすること」(『人類の知的遺産・モンテーニュ』講談社) 人間には生まれること、生きること、死ぬことの3つの事件しかないと言われる。周囲で身近な人の死に立ち会い自分にも実感される今日この頃、死の不安に苛まれながら楽しく生きることを忘れてはいけない。思い残すことなくやりたいことに時間を使えば往生。

◆「“型破りな人材”であるためには、まず基本となる“型”を押さえなければなりません」(『文芸春秋2017年論点・作家・佐藤優』文春ムック)

バスケットボールにおいては、型破りなプレイには基本となるストップとかボールハンドリングが欠かせない。また、本物の芸術などに触れることによって磨かれる感性が創造力を刺激する。創造力が富むことによって型破りなプレイがひらめいてくる。

◆「きらびやかに輝くシャンパンタワーはたった一つのグラスが傾いただけで崩れ落ちる」(『文芸春秋2017年論点・政治アナリスト・伊藤惇夫』文春ムック)

政界は一寸先は闇と言われるが、バスケットボールの世界もしかり。勝利に恵まれている時は賞賛の嵐であるが、いったん負けがこむとガラッと周囲の風景も変わる。大事な物事は小さなことの積み重ね。ひとつでもおろそかにしたら最後、全体は見事に崩壊する。

2・新聞のコラム等から

◆「“教員多忙化対策”先生、部活やめるってよ……生徒」(朝日川柳・かたえくぼ)

学校における部活動指導が社会問題になっている。熱心に指導したい先生にとってはえらい迷惑な話だ。その昔、会津には「三狂」と呼ばれる中学校の名将がいた。あの先生たちはどのようにして時間を作り指導していたのだろう。「忙しい」という言葉は聞いたことがなかった。「忙しい人ほど時間を作る」は今では死語となってしまったか。

◆「卓球“は”すごいねではなく、卓球“も”すごいねと言われる選手になりなさい」

「心の狭さは、戦術の狭さにつながる」(朝日・卓球・平野美宇が受けたある助言)

勉強ができないからバスケットで頑張るはずで時代遅れとなっている。勉強はもちろんのこと、学校行事、ボランティア、芸術鑑賞などにもかかわることによって視野が広がり、感性も豊かになる。その結果、新たな戦術、戦略の発想が生まれる。

◆「ふつうは障壁と考える加齢という現実を受け入れ、しかし、可能性をあきらめない。年を重ねることで得たものを駆使し、できることに絞って果敢に取り組む。この柔軟さが、羽生さんの強さを支えてきた」(朝日社説『羽生永世七冠・探究心と、柔軟さ』)

勉強してもすぐに忘れてしまう今日この頃。とことん学び、準備する。その後、レジメを見なくても頭に残っていることが子どもたちに伝わる内容だ。他人の受け入れではなく、自分が本当にできる、わかることで勝負する。ワンパターンにならないよう変化をつけて。